〈社会科教育情報〉

新聞記者の小学校授業体験

―日野市立日野第六小での「ＮＩＥ」―

芳　垣　文　子*

1　先生と打ち合わせ

今年の２月９日。少し緊張気味に，ＪＲ中央線の豊田駅から日野市立第六小学校に向かった。５年生を対象に社会科「情報と社会」の授業を行うためである。都内の私立高校で教壇に立っていた経験はあるものの，すでに20年前の話だ。

ＮＩＥ（エヌ・アイ・イー＝Newspaper in Education）は教育に新聞を生かそうという活動である。学校からの要望に応え，現場記者が出向いて授業を行うのもその一環だ。昨年も清瀬の市立中学校で授業を行った。

学校からの「記者派遣申込書」には，「５年社会の『情報と社会』の中で，情報を得る手段として新聞が取り上げられているが，あまり関心を持って新聞に目を通している子は多くないので，新聞の面白さ，ウラ話，記事を書くときの苦労や記者という仕事をやっていてよかったこと，トリビアのような話などなど，お話ししていただいて興味を持たせたいと思い応募しました」とある。

授業は３，４時間目の２時間分で，質問時間などを除くと正味１時間。２クラス約60人を前に話をする。事前に担当の先生と電話で打ち合わせをした。残念ながらスクープ記事とは縁がない。「失敗談や苦労話ならたくさんあるのですが」と打ち明けると，先生は「そういう話の方が子どもは興味を持つと思います」と言ってくださった。

2.　「持ち物検査」

最初はまず，「持ち物検査」から入った。といっても児童のではなく，自分のかばんの中身を見せる。

ショルダーバッグから取り出したのは取材ノート。取材相手から聞き取ったメモだけでなく，資料もベタベタ貼り付けてあるので，これがないと記事が書けない。万が一どこかに置き忘れた時のために，私は名前と支局の電話番号を表紙に書いてある。

携帯電話，デジカメ，ＩＣレコーダー，腕章，地図，ポケベル，手帳，名刺。この日は持参しなかったが，ノートパソコンも必需品だ。電子機器に必要な電池やバッテリー，メディアを読み込む時のカードも欠かせない。一つ一つ手に取って掲げながら見せた。

「事件や事故の現場に行った時は，取材していることが分かるようにすぐに腕章を着けます。文章や写真はその場でパソコンから送信する。締め切りが迫ってパソコンを開く余裕がない時は，頭の中で文章を作って携帯電話で吹き込みます。受け手の記者が文章を整えてパソコンに打ち込み，記事になります」。

ポケベルは小学生には馴染みがないかもしれない。携帯の電波が届かない地下でも呼び出しが可能だったり，携帯が話し中だったりする時に役に立つ。今でも同僚記者のほとんどはポケベルと携帯の二本立てだ。　現物を見せると子どもたちはへえーという表情で興味を持ってくれたようだ。

3.　「訂正」の失敗談

新聞には「版」があること，小さな訃報記事でも何カ所にも確認をしてから書くことなどを話した後，失敗談に移った。

入社してしばらく内勤職場にいた後，水戸支

＊朝日新聞立川支局

局に異動したころの出来事だ。宿直勤務が明けたところに，１本の電話がかかってきた。交通事故の被害者と加害者の住所が間違っているという読者からの指摘である。電話を受けたそばからすーっと血の気が引いた。自分の書いた15行ほどの短い事故の記事で，確かに指摘の通りなのである。

発表の広報文を基に警察に電話取材し，書き直しているうちに，被害者と加害者の住所が入れ替わってしまったことに気づかぬまま出稿したのが原因だった。

被害者は亡くなり，加害者は逮捕。それぞれのお宅に菓子折を持って謝りに行った時のことは今でも忘れられない。亡くなった男性の自宅を訪ねた時は，ちょうど遺族が車座になって故人をしのんでいるときだった。遺された奥さんは「わざわざどうも」と言ってくれたが，ひたすら頭を下げてその場を失礼した。翌日の紙面で「訂正」を出した。

一度紙面になって世の中に出た情報は事実として受け止められる。訂正を出しても，全ての読者が気が付くとは限らない。しっかりと確認しなかった自分のせいで，当事者や読者に迷惑をかけてしまった。そのことが少しでも子どもたちに伝わればとの思いだった。

4.　「はなわ」も登場

１時間の中で，小学生を退屈させないためにはどうしたらいいか。高校で教壇に立っていた頃もそうだが，子どもたちが顔を上げてこちらに注目しているときは興味を持ってくれていると思えるが，だんだん下を向いてくると気持ちが別の方向に向かっている証拠だ。

少しそんな気配が見え始めたころ，「有名な人を取材することもあります」と切り出した。取材したことがある中で子どもたちが知っていそうな人だと，ベース漫談の「はなわ」。「みんな，はなわって知ってる？」と問いかけると，傍らから先生が「はい，知ってる人手挙げて」と助け船を出してくださった。半分くらいの手が挙がる。なるほど，こうすると子どもの意識がしっかり確かめられる。

佐賀県の菓子メーカーが作っているアイスクリームをテーマに記事を書いたことがある。そのとき，はなわにアイスを抱えてもらって撮影し，思い出話を聞いた。

面白かったのは，彼の髪の毛である。テレビで見ると一角獣のようにピンと立っているが，楽屋に入って来た頭髪は「寝て」いた。撮影前にドライヤーを使い，器用に自分で形作ることを初めて知った。それから，芸人ではよくあることかもしれないが，テレビで見るよりずっと真面目な印象を受けた。どの程度興味を引けたか分からないが，こんなこともちょっとした裏話として，子どもたちに披露した。

5.　多々あった反省点

話の途中で「あ，いけない」と思った一瞬があった。記者として支局に配属されると，最初は警察担当になる。日々起こる事件・事故を通して取材の基礎を学ぶためだ。普通「サツ回り」といい，私も水戸支局にいた頃，半年間警察を担当した。

「みんな『サツ回り』って知ってる？」と聞いてみた。テレビドラマなど聞いたことはあるだろうと思っていたのだが，手を挙げる児童は一人もおらず，きょとんとしている。「やっぱり小学生には使ってはいけない言葉だった」と反省した。そばで聞いていた先生も，びっくりされたに違いない。

もう一つ，新聞を使って説明する動作は一つにまとめるべきだった。NIE の授業当日には，販売店から人数分の新聞が学校に配達される。新聞を見ながら版立ての説明をしたあと，いったん別の話に移ってからから再び社会面の訃報を見てもらった。

子どもは大きくかさばる新聞を開いたり閉じたりすることになり，授業の流れも中断した。慣れている先生方には当たり前のことかもしれないが，こういうことも考えながら授業の構成

を組み立てなければだめだと感じた。

6. 子どもの質問

残り約20分を質問に充てた。実はこの時間が一番ドキドキする。昨年清瀬の中学校で授業では質問はたった一つしか出なかったのでちょっと不安だったが，いくつも手が挙がった。

「昨日は何時頃寝ましたか」「かばんの重さはどれくらいですか」「新聞記者をやっていてよかったと思うことはどんなことですか」。話がうまくなかったせいだと思うが，子どもたちの質問は新聞そのものより，記者個人のことに集中した。

生活はかなり不規則であること，でも取材を通して色々な人に出会えることなどを答えた。ショルダーバッグの重さは目分量で「4，5キロかなあ」と答えておいたが，あとで量ってみたら4キロだった。大きく外れていなくてホッとした。